

目覚めたロボ子は何を 想う

雷蛇 1 9 4 2

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

工事の音で目を覚ました記憶喪失のロボ子さん。荒れ果てた部屋の中で拾った端末に残された複数のメール・・・荒れた世界で彼女が歩む道とは?!

本作品はVTubeである「ロボ子さん」を基軸に全く異なる世界線を描いた物語です。

原作ブレイク、駄文等が苦手な方には向きません。

あらかじめお詫び申し上げます。 m () m

目次

番外編

ロボ子さんフォロワー3万人記念「ロ

ボ子孤独のグルメ」 | 1

ロボ子さん2周年記念小説「あるいは

どこかの戦場で」 | 7

本編

——robottoが目覚める

24

過去と未来と現在と | 34

そして歩み始める | 42

南東へ | 51

吹き返す息は誰がためか | 58

キカイな国

再会の兵士

63

70

番外編

ロボ子さんフオロワー3万人記念「ロボ子孤独のグルメ」

「あ、あ、あ、あ、!!まずいそれはまずい!!」

フオートナイトをいつもながらn・・・久しぶりにソロでプレイしている。違うもん、ロボッチじゃないもん。

まあ壁で囲まれて射殺されました。強すぎ・・・

少し疲れたな、何か食べて休憩しよう。

今日もバーチャル世界は平和です。なんのことはない、ただの日常的一幕。

サツと食べて休憩するならやっぱりハンバーガー!栄養満点の朝飯の代表だけど食べ過ぎは体に良くない。たまに食べるだけなら旨ければ問題ないけどね。

マクドナルドとかウエンデーズとかジャックインザボックスとか、モスバーガーとかカフナバーガーとか。

とりあえずトマトは抜いてもらわないと。

しかして今日の目的はハンバーガーではない。並ぶようならやむなくハンバーガー

だけどね・・・

出かけるために身支度を素早く整えて自室を出る。

今日も太陽は見事に地表を熱している。少し頑張れば地面で目玉焼きが作れそうなくらいの熱気だ。熱中症には気をつけなきやね。塩タブ？知らない子ですね。

機械少女移動中・・・（くわっ！）

駅前やショッピングモールというのは意外とハンバーガーショップが多い。

周りを見るだけで既にくつかのハンバーガーショップが見受けられる。他にも牛丼屋やファミレス、喫茶店が並んでいるが、今日の目当ては駅の近くに有る路地を抜けた先。

小さなラーメン屋がある。ここに用があつたのだ。普段は結構並ぶが、今日は空いている。時間が良かったのかもしれない。

ここのラーメン屋は基本的に「ませそば」で、少量のスープに適度な麺とたっぷりの野菜とチャーシュー、もやしに乗った卵黄が特長だ。

更にはトッピングでチーズ、ニンニク、ヤサイマシマシ、などと他の店共通の暗号まで使用可能だ。

注文は外にある券売機で券を買って、店員に麺の硬さとトッピングを注文していくと
いった形式だ。

「いらつしやい！(´)注文は？」

「ヤサイマシニンニクでお願いします」

今回は醤油味をチョイスした。トッピングはヤサイマシ、ニンニクの2つ。これがまたうまい。

店の内装はカウンター席のみで、店内にはアニメ調の音楽が流れている。

ラーメンが出てくるまでの間にセルフサービスのお冷を用意する。ここのお冷は店の隅にあり、カウンター席の後ろが狭いので人が多いときは大変な作業だ。

一応昼下がり、まだ客もまばらにいる。カウンターは端が空いている。他の客は中央やウォーターサーバーとは逆側に座っている。まあ、わざわざあの端を取る人も少ないか……

空いているならまあいいか、とばかりにサーバー近くの席に座る。

もう、この少し油っぽい空気や目の前で茹でた麺をドンブリに入れてスープを注ぎ、具を載せていくところを見ているだけで既に楽しい。目で楽しみ、鼻で楽しみ、味も美味しい。最高ではないか。

つと私の分ができたようだ。店員がドンブリに野菜をたっぶり載せたラーメンを運

んでくる

「お待たせしました!」

熱気を帯びたスープと麺、その他具材から発せられる湯気で私の眼鏡が曇る。とりあえず外しておこう。

まずは目で、深めのドンブリにはたっぷりの野菜が盛られていて麺を見ることができない。野菜の上には卵黄が載っていて、その上から塩コショウが振つてある。

「いただきます」

割り箸を手に取り、そつと左右に割る。パチンツと小気味の良い木の割れる音が鳴る。

匂いは最高だ。醤油系のスープにコシヨウとニンニク、チャーシューの匂いが適度に混じり合つて、まるで匂いの4重奏カルテツトだ。

ドンブリに箸を入れる。ませそばゆえに具材とスープを上手く混ぜる必要がある。

箸を使つて麺を下から上に移動させ、麺と具が適度に混ぜ、そつと麺と野菜を持ち上げ口に運ぶ。

「美味しい!」

卵黄が割れて野菜や麺、チャーシューと混ぜり合い、そこに醤油の風味がドーンと来る。その後からニンニクの甘味と適度な辛味が効いている。更に卵黄が絡むことで全体

的にマイルドな印象になっている。

野菜の量は多いが、なかなか進む。麺よりもやしとスープで絡んで麺と分厚いチャーシューは少しずつしか進まない。

が、これがまたうまい！チャーシューの脂身とキャベツ、もやし、麺の組み合わせが絶妙にコツテリしつつも後味がスツと収まる感じ。

コシヨウも適切な量で辛くなりすぎず、且つ脂やニンニク、スープの味を引き立てている。

またこの分厚いチャーシュー！なんと一番厚いところで目測3cmはある。もはやこれはチャーシューというより肉塊だ。これが2つも3つも載っている。

更にこの太平麺のスープとの絡み具合の秀逸さ。ガツシガシと噛むこの麺がキャベツやもやしの自然の甘みを受け流しつつも醤油ベースのスープの味を受け止めている。やはりラーメンとはこうでなくては！

ズズズズズルッ！とどんどん口に、胃に吸い込まれるようだ。

しばらく食べていると野菜がほとんどなくなってしまう。

第一ラウンドが終わって、始まったのは第二ラウンド。量自体は大したことはないが、残った麺とスープの量がちょうど良く均衡がとれていてここからは純粋なラーメンとしての質が問われる。

チャーシューと適度に取り残された野菜が太平麺に絡みついて口の中へと運ばれる。うまい！こつてりとした脂とさっぱりめの野菜、そこにキシキシの麺と醤油ベースのスープのコンボ。例えるなら格ゲーで強攻撃の連撃を喰らった直後に弱攻撃でパターンに持ち込まれるような見事な連撃（※ハメ技はトラブルの原因になるのでやめましょう）

「ごちそうさまでした」

食べ終えたドンブリとコップををカウンター上段に乗せ返却する。

思えば結構早く食べ終わってしまった。とりあえず帰ったらフォートナイトでリベンジマッチを・・・

時刻は14時45分、昼飯終わりにはいい時間だ。

さて、夕飯は何にしようかな♪

このrobotto、まだ食べる気でいるのであった

ロボ子さん2周年記念小説「あるいはどこかの戦場で」

エンジン音の甲高い音が響く機内を歩く足音が聞こえる。ブーツじゃなくて、もっと硬いもので歩く特徴的な足音だ。

「はろーぼー？起きてるー？」

機内の仮眠ベッドで寝ていた俺を起こすためにはしごを登って顔だけ覗かせている彼女が「高性能ロボット」を自称するロボ子さんだ。

彼女はいつもの「仕事」の相棒であり、あまり大きな声で言えたものではないが俺が密かに思いを寄せる相手でもある。

「ああ、今ちようど起きた。」

俺が返答するのを聞き届け、ロボさんはベッド脇から頭を引つ込める。それに数秒遅れベッドを降り、ベッド脇に置いておいた荷物を身に付ける。

身支度を手早く済ませ、キャビンへ移動するとロボさんは既に準備が完了しているらしく、こちらへ視線を向け

「準備はいいい〜？」

と問いかけてくる。

俺はキャビンの座席に放っておいたバッグを手に取り、返答する。

俺が返事をするや否や、ロボ子さんは機内壁面に取り付けられたハッチ開閉用のスイッチを押し機体後部のハッチを開ける。

ウイーンというモーター独特の駆動音が足元に微細な振動を伝えながらゆっくりと後部のハッチが開いていく。それに伴い機外で鳴っているエンジン音がよりはつきりと聞こえるようになった。

ハッチが完全に開き空中輸送員が降下可能なサインを出すのを確認すると彼女はこちらに一瞬目をやり、機外へと走り出した。それに続き俺も走って機外へ飛び出す。

開傘高度は300mだからしばらくは自由落下に身を任せる。

耳につけたイヤホンから無線連絡が聞こえる。

『指揮所CPよりD11。今回の作戦では敵拠点の中央、地下最深部に保管された物資の回収

だ。降下地点は北東の森。作戦行動域には複数のアンドロイドが確認されている。注意しろ。out』

無線連絡を聴き終え、高度計を確認すると間もなく400mを切る。予定通りパラシュートを開き、降下地点へ誘導する。

無事降下完了すると急いでパラシュートをまとめ、周囲の適当な石などを載せて飛んでいかなないようにする。

着地の時に外した足の間にはぶら下げていたバッグから銃を取り出す。各々用意した兵装を身に付け、バッグを背負い準備を整えていく。

俺やロボ子さんはメインアームにAKを支給されているが、当然プレートキャリアやサイドアームが微妙に違う。

ロボ子さんより少し早く準備が整った俺は無線機を取り出しCPへ状況報告を行う。

「こちらDリーよりCP。目標地点に到着、これより作戦行動を開始する。over」

『こちらCP、了解。Out』

しかし、ここ十年の技術の進歩は目覚ましいな。俺が子供の頃の無線機なんて音声に結構ノイズが入ってたのに、かなりクリアな音声で聞こえるんだもんな。

・・・それに、アンドロイドなんてのも出来てるしな。

「準備できたよー！・・・んんん？どうしたの？考え事？」

用意ができたロボ子さんが後ろから話しかけてくる。

しまった、交信終了してたつてのに周囲の警戒を怠ってた。

「いや、大丈夫。なんでもないよ・・・」

俺はプレートキャリア胸部のコマンドパネルから地図を取り出し、現在位置から目標までの道程を確認する。

地図をしまつてからAKを構え直し、周期に気を配りながら慎重に目標へ向かうルートにつく。

しばらく歩き、体感で30分ほど経過したあたりでコンクリートの壁が木々の間に覗く。地図によればもう少し先で敵の拠点を見下ろせる地点に到着するはずだ。

不意に進行方向から何かの動く音が聞こえた。俺たちは自然に無言になると同時に銃口を音の方向へと向けていた。進行方向、木々や茂みに遮られた向こうから話し声はしない。ただ、確かに乾燥した枝や草を踏む音は鳴り続けている。

5m、4m、3m……と確実に近づいてきている。もう茂みの向こうだ。

聞こえた足音は1つだけ。銃にはサプレッサーも付いている。出てきたら撃てばいいだけだ。

セレクトターをセミオートに静かに切り替えてトリガーに指を掛ける。

足音がならないように土の地面が露出している部分を通り茂みの裏を覗ける位置に移動する。ロボ子さんへ目をやるとゆっくりと頷いた。

ゆっくりと膝を曲げ、茂みの裏を覗く。無機質で、明らかに人間ではない物体の一部

が目に入る。ソレは恐らく周辺の警備を行っているのだろう。

ゆつくりと照準を定め、引き金を絞るように引いた。

パシッ！一つだけ乾いた音が鳴った直後に重いものが倒れる音が聞こえた。

茂みの影から出ると足元に転がったアンドロイドに2発改めて撃ち込み、確実に動作を停止させ、周辺の敵影を確認する。

「クリア」

俺が制圧を完了したことを伝えるとロボ子さんは茂みの向こうから顔を出した。

「ごめんね、熱源センサーがちゃんと作動してなかったみたい」

彼女は眼帯のセンサーをチェックしているのか、しきりに眼帯の側面についたスイッチを操作している。

「うん、これで大丈夫」

そう言いながらAKを構え直す彼女を脇目に破壊したアンドロイドを調べてみる。プレートキャリアに付けられたワツペンは敵勢力のもので間違いない。

装備はスタンダードなARR15とグロック、無線機はないな。他にも似たような装備だろう。

引きずって茂みの中にアンドロイドを隠し、アンドロイドが来た方向へ歩みを進める。

今回みたいな物資の回収、あるいは破壊の任務の場合は特殊なケースで、普通なら小隊規模の部隊を派遣するのが普通だ。潜入という特性上どうしても人数を減らしての任務になったらしい。

・・・戦闘になったときのリスクが異常に高いし非合理的だと思うが、一体どこの誰だ？ 今回の作戦を立案した奴は。

崖の上についてからしばらくの間ロボ子さんはずっと双眼鏡を覗きながら地図にマーカーで何やら書き込んでいる。横から覗いてみると点線やバツ印などを書き込んでいるから敵の警備状況なんかを書き込んでいるんだろう。

「うーん。見える限りだとこれで全部かな。はいこれ。」

彼女は片手で双眼鏡を仕舞いながら書き込んだ地図を俺に手渡してきた。

「助かる。・・・ルート変えないと最悪結構な戦闘になるな」

地図上に書き込まれた警備ルートを見ると、当初予定されていた物資までの最短ルート上に警備が2重3重と張られている。迂回するルートを探してみるが地下への侵入ルートを考えると大幅には変えられなさそうだ。

「たぶんだけどルートは変えない方がいいと思う。・・・接敵した相手だけ倒して早急に侵入すればなんとかなるんじゃないかな？」

おお、なんたる脳筋か。しかし、今回の侵入経路はシャッターが開いている地下への搬入路だし、現状開いているのが確認できているのはそこひとつ。

基本的に目標までは直線だし、一気に駆け抜けければなんとかなるか・・・

「わかった。それでいこう」

俺はロボ子さんの提案に乗ることにした。

基地内への侵入は事前調査でフェンスの金網が破損している場所があるのを聞いているのでそこからの侵入とする。

「CP、CP。こちらD11。ウェイポイント4を通過、基地内へ潜入する。over」

『こちらCP、了解。これより無線を一時封鎖する。out』

最後の無線連絡を行い、フェンスの切れ目から基地内へ侵入。先ほどの森の中とは違う空気感に俺とロボ子さんは気を引き締めなおす。

「ボクが先行するね。ついてきて」

俺は首を縦に振り、ツーマンセルのセオリー通りにロボ子さんの死角をカバーする体勢に入り、彼女はやや姿勢を低くして足を進め始める。プレハブの倉庫の影から倉庫影へ、コンテナの影へと移動しながらクリアリングを進める。

まもなく先ほど崖上で確認した警備ラインの一つに差し掛かるといとき、ロボ子さ

んは静かにこちらへ語りかける。

「近くに複数の熱源……警備アンドロイドがいるよ、気をつけて」

ロボ子さんの警告を聞き、そつと銃を構え直す。心なしか銃を握る手に力が入る。

彼女が先に次のコンテナの影に移動し、ハンドサインで「そこで待て」と合図を示してきた。足を止めて彼女を注視すると、それに続いて「3カウント」「突入」の合図もきた。

1……2……3……！俺が倉庫の影から躍り出るのにあわせ、彼女も飛び出した。

目視で2体のアンドロイドを確認すると同時に射撃を行う。1体目の頭を5、4、5x39mm弾が貫き、その体が力なく倒れ始めた時には既に2体目に銃口を向けてトリガーを引き絞っている。

2体のアンドロイドが地面に倒れるのを目で追い、他の敵影を探す。見た限りは動きはない。アンドロイドの破壊確認のために近寄ろうと気を緩めた直後。背後から発砲音が2回響く。

「危ないよー！もう！ちゃんとクリアリングしてつてばー！」

どうやら俺の後ろに潜んでいた敵を見落としていたらしい。ムツとしつつもカバーしてくれる彼女の優しさに涙が溢れそうだ。

「すまん、助かった。」

俺のすぐ後ろに倒れているアンドロイドに2発撃ち込んで破壊を確認しているロボ

子さんに礼を言いながらも俺は俺で2体のアンドロイドの頭と胴体に1発づつ撃ち込み完全破壊を確認し、周囲の安全もチェックする。

「クリア」

周辺の敵性の有無を確かめ、ロボ子さんへ周囲の安全確保を伝える。

俺はAKのマガジンを抜き、新しいマガジンへ交換する。残弾が残っていても早めに入れ替えて不意の弾切れを防ぐのだ。俺のリロードを確認すると彼女も同様の操作を行い、移動の合図を送ってくる。

その後は特に警備と接触することもなく地下搬入路前まで移動が終わり、屋内へ侵入することとなった。

「ムーブ」

移動を伝えてくる彼女の背後にびったりとくつき後方からの接触を警戒する。

彼女が俺の肩を叩いて合図を送る。後方の警戒から地下へ入る彼女のカバーに入るために前へ向き直った。

開いたシャッターの向こう側は薄暗い蛍光灯に照らされ、不気味な雰囲気を感じさせる。どうやらここはまだ荷物を置くような場所ではないらしく広い空間の割には閑散としており、特に何か置かれているような場所ではないらしい。彼女に続いて俺も地下

へ入る。

監視カメラは特に見当たらない。俺たちは更に歩みを進める。

下りの階段を地図通りの場所に見つけ、作戦前に確認したフロアまで何事もなく降りることに成功した。

「・・・ねえ、何かおかしくない?」

しかし、俺同様に彼女も違和感を感じ取ったのか俺に向き直り声をかけてくる。その声は先程に比べてやや深刻そうなトーンだ。彼女は続ける。

「どうしてさっきから全然敵に出会わないの?」

言われてみればその通りだ。ブリーフィングで聞いていた限りでは相当数の敵が配置されているはずだ。人間と違い、アンドロイドは職務を離れない。警備を離れるとすれば、侵入者を排除するために集合するときか・・・。そこまで考え及んで俺は気が付く。

「・・・もしかしてだけどき、ボクたちってここに誘い込まれたってことはないよね?」
彼女が言い切るのを待っていた、と言わんばかりにフロアの照明が全て消えた。

俺とロボさんは即座に銃を構えて通路の前後を警戒する。

音はない。特に何か動きがある気配もない。俺はヘルメットに取り付けられた暗視

ゴーグルを下ろし、電源を入れた。緑色の視界が画面上に広がる。

特に視界に映る敵はいない。ロボ子さんは暗闇が見えているのか、こちらの肩を叩いて前方への移動を指示している。

ゆつくりと移動を開始し、敵の存在を探りながら前進する。

もうすぐで指定の物資が置いてある部屋に着く。彼女が歩みを止めてしやがみ、「止まれ」とハンドサインを送ってくる。

赤外線式の暗視装置を使っていたため直ぐにわかった。赤外線センサー式の仕掛け爆弾だ。

センサーから伸びたケーブルを追ってみると通路の左隅にはC4爆弾が設置されている。起爆すればおそらく通路は崩落するだろう。

「解除できる？」

ロボ子さんがこちらへ問いかける。

「見た限り、センサーを動かしている電源ユニットは信管を作動させているものと同じだから、そこからのケーブルを切断すれば停止すると思う」

ただ、その電源ユニットはセンサーの向こう側という問題を除けば解除は可能だろう。

「うーん・・・流石に向こうに行けるわけじゃないしなあ・・・」

俺の提案では解除できないだろうと悟ったのか、ほかの方法を考えるロボ子さん。俺は周囲を見回してほかの方法がないか探る。

壁にはパイプ、天井には電気のカール。他には・・・他には・・・ふと、パイプに書かれた文字が目に入った。

『Liquid nitro^窒gen』だ・・・。今回は用意してなかったから頭になかったが、プラスチック爆弾は冷却による無力化の方法もあるのだ。

「壁のパイプに液体窒素が通ってる。うまく吹きかけられれば無力化できるかもしれない」

彼女は頷くと銃を構え、一回だけ引き金を引いた。

パイプから火花が散ったと思った直後、パイプから液体窒素が流れ出し、C4爆弾とセンサーにかかっている。

センサーから照射されている赤外線が消えるのを確認してから通路の途中にあった台車を通してみるが、爆発の気配はない。無力化はできたようだ。

床の液体窒素もできれば踏みたくないし、台車の上を通ることにしよう。俺が先にセンサーを超えて、ロボさんはおっかなびっくり通ってくる。

まあ確かにどっかのロボットは液体窒素で凍らされてから撃たれてバラバラにされてたっけな。

目標の物資が置かれている部屋に着き、ロボ子さんと俺で手分けして目標を探す。敵の新型兵装らしいが・・・えーと・・・？

「えーと・・・これじゃない。これでもない・・・あ！あつたー！」

ロボ子さんが目標を見つけたらしい。銃・・・？いや、グレネードランチャーか？

ハンドガンのようなだが、M76グレネードランチャーみたいだな・・・なんだこれ。

ロボ子さんはバックバックに目標を詰めて部屋を出ようとして気が付く。

敵の足音だ。一つじゃない、大量に。

「囲まれた・・・」

俺はゆっくりと部屋の外を覗き込む。一瞬間を出しただけで隠れていた壁に大量の銃弾が飛んでくる。イチかバチかグレネードをポーチから取り出して通路へ投げる。

「ファイアインザホール!!!」

壁にグレネードが当たって跳ね返る音に続いて破裂音と金属片が飛び散る甲高い音が狭い通路にこだまする。グレネードは予備含めてあと2つ。ロボ子さんはAKのアンダーバレルに取り付けたグレネードランチャーに弾薬を装填している。

俺は多目的榴弾と高性能炸薬弾の二種類がそれぞれ3発ずつバックバックに用意がある程度だし・・・流星石に対処しきれぬ気がしない。先ほど俺がグレネードを投げたの

とは逆に向けてグレネードランチャーを撃つロボ子さんを尻目に俺は考える。どうすればいいのか。どうすれば脱出できるのか。

「ロボ子さん、今回の目標。見せてもらっていいか？」

彼女はそれどころではない、と言わんばかりに無造作にバックパックを投げて寄越した。

見たところグレネードランチャーではない。銃身が中折式で……カートリッジは入ってる。横の赤いレバーがセーフテイか！

銃身横のランプが青く光った。俺は銃身上部のホロサイトの電源を入れてロボ子さんへ渡す。

「多分それもう撃てるぞー！」

ロボ子さんと代わり、通路への射撃を代行する。これだけ数がいちや撃つても撃つてもキリがない。

「どいてー！」

彼女が叫んで、通路へ躍り出る。

彼女がトリガーを引いた瞬間、銃身から青い光が飛んでいった。そして数瞬後には通路奥から爆発音が響いた。その隙を見逃さず、俺も通路へ移動してグレネードを投げて後退を開始する。

多少暗くても暗視ゴーグルで見えている。走って地上を目指す。流石に包囲されているだけあって通路の節々で接敵するが、攻めて来ていた数に比べると圧倒的に少ないため排除はすぐに済んだ。

階段を駆け上り、通路を走り抜け、最初に侵入した地下搬入路までたどり着く。光が見える。外の光だ。走って外まで抜けた。そのまま物陰まで移動し、身を潜めてから胸のあたりにある無線のP T Tスイッチを押し込みC Pへ連絡する。

「C P、C P！こちらD 1 1。目標を確保！これより撤収する！ポイントH—2—5へ回収へりを！over！」

「こちらC P。これより無線封鎖を解除。ポイントH—2—5へ回収へりを回す。到着予定時刻ETAは10分後だ。Out」

無線連絡を終わらせ、作戦目標を持ったまま離脱地点まで移動を開始する。

「回収へりが10分後に離脱地点に来るぞ！」

A Kの空になったマガジンをバックパックに詰め込んで新しいマガジンをマグポーチに移し替え、弾薬の用意を整える。

「ボクはもう行けるよ！」

俺より早く準備の終わったらしい彼女は俺たちが出てきた搬入路に銃口を向けて警戒しながらこちらに準備の催促をしてくる。

「俺ももう終わった！いくぞー！」

そこからはひたすら走って、走って。離脱地点の手前でヘリの到着を待った。

到着したヘリに乗り込んで敵基地を離脱。無事に作戦は終了。ヘリに揺られて着いた先は演習場のヘリポート。

今回の作戦は物資の強奪、または破壊を行う実戦形式での演習。

もちろんアンドロイドは実物だが撃ってる銃は演習弾だし、爆弾は信管がセットされておらず、センサーに引つかかると大量の煙が出てくるだけだし、敵基地と想定していた場所も普段は他部隊がCQBなんかの訓練を行うのに利用している施設だ。

上官から「後半、物資を回収してからの動きが甘い。」だとか色々文句は言われたが、他部隊からの印象は良かったらしい……。主にロボ子さん辺りのだが。

演習後の式辞だとか諸々が終わり、演習場の出口へと重い足を進める最中、俺はぼそつと「色々、ありがとう」と呟く。

するとロボ子さんは一瞬珍しいものを見たような顔をしたあと

「えー？何か言った？もう一回言ってくれろ？」

などと悪戯っぽい笑顔を向けながら言ってくるので、照れ隠しのつもりで俺はもう一言彼女へ呟く。

「これからもよろしくつてな・・・」

夕焼けのせいか、ロボ子さんの顔はほんのわずかに赤らんでいるように見えた。

t o b e n o c o n t i n u e d . . .

本編

—— robottoが目覚める

——ガガガガ！ドドドド！と腹の底に響くような轟音が私の意識を回復させた。

音紋を照合するとどうやら工事の音らしい。全く人の迷惑を考えて欲しいものだ。

せつかく人がゆつくり休んでいたのに。

あまりに音がうるさいので移動しようと思い立ち上がろうとする。

ガギギギギイ・・・と錆び付いた扉を無理に開いたような音が私の膝から、そして全身からけたたましく音を鳴らす。

どうやら各関節のアクチュエーターがイカれてるようだ。

自己修復プログラム開始・・・エラー：ナノペーストが枯渇しています。直ちに補給してください。

自己修復用のナノペーストがないらしい。私のメモリーが壊れてないのならば最後に確認したときは補給直後なのだから根本的に足りなくなると言うことはありえない。とはいえ、ここで思索していても始まらない。自己修復をナノペーストからナノマシン

へ切り替える。

自己修復プログラム、0%完了・・・終了まで90分。メインシステム：robocoを再起動、メモリーのクリーンアップを開始します。

ああ・・・そうか、ずいぶん長い間眠ってたんだ——
そこで改めて私の意識は途切れた。

main system：roboco

language：Japanese

error：Memory corruption

メインシステム：roboco

言語：日本語

エラー：メモリが破損しています

対処：メモリのフォーマット

フォーマット開始、10%完了・・・20、30、40——

メインシステム：roboco、再起動します

周囲に明かりはない……ここはどこだろう。周囲の音を聴覚センサーが騒音をカットして伝える

音からして重機を近くで使っているのだろう。直上から音が大きく聞こえ、もたれかかっている壁からも振動が伝わってくる。

この場所に来るまでのメモリーが一切ない、記憶喪失というやつか？とりあえずは今の場所の把握をしよう。目の光感度を上げるがやはり何も見えない。光が一切無いようだ。外部装備の暗視装置は……使えそうだ。ただし内蔵バッテリーの状況からしてせいぜい20分が限度か

立ち上がろうと体に力を込める。各関節のアクチュエーターが確実に体を動かし、外付けの強化服の補助動力で立ち上がることができた

が、顔にクモの巣が張り付いた

「びい!!」

突然顔にクモの巣がついて驚いてしまった。思わず自分でも驚くような奇声が出てしまつて2つの意味で驚いた。

「すう……へつくちゅん!うえ……埃っぽい……」

顔に張り付いたクモの巣を払い、深呼吸を試みたがどうも随分と埃がたまっていたようだ。くしゃみが出た。

立ち上がったって気がついたがどうして右足にレッグホルスターを付けていて頭に暗視装置を装備しているのだろうか。

とりあえず全部後回しだ。早急にここを脱出しよう。

暗視ゴーグルのスイッチを入れる。キーンと甲高い音を立て、赤外線をライト部分から投射しその反射光を受光部で感知する。ゴーグル内側の画面に解像度のあまり良くない映像が映し出される。

「うーん……どうだろう、ギリギリ使えそう……」

大した画質ではないが、緑色の映像はここが誰かの私室であったということを物語る。

ベットが壁際に置かれ、机の上にはコンピューターが本棚がありこの部屋に出入りするための扉、ウォークインクローゼット。内装のカラーリングなどは分からないが今のでいくつかわかったことがある。

何かしらの災害があったかかなり部屋の中は荒れに荒れていた。

どうして私はこの部屋にいたのか、などの疑問を振り切って扉へと歩みを進める。

部屋を出て廊下に行くところもまた壁が崩れかけていたり荒れていたが、どうにか隣の部屋に移動は出来そうだ。隣はダイニングキッチン、そこから玄関や風呂などの部屋に移動できる構造になっているようだ。

ここも他の部屋同様だった。

玄関・・・ここを出て、どうするのだろうか。

自分の記憶を探っても何もわからないというのに。

いや、それでも。ここで止まっただけではどのみち結果は変わらない。暗視装置の稼働している今のうちにできることをやる、今はそれだけでいいはずだ。

玄関に向かつて一歩前に踏み出したとき。足元に何かある事に気がついた。円筒状の物体・・・尾部に何やらスイッチのようなものがある。試しに押してみるとカチツという音と同時に明るく光を放った。

懐中電灯のようだ。バッテリーにどれだけの余裕が有るかは分からないが、暗視装置以外の光源を確保できたのはありがたい。近くには小型の端末が置かれていた。こちらはどこを弄つても反応すらない。

2つをポケットに仕舞い、玄関の扉を開ける。軋んだ音を上げ、かなりの抵抗を生みながらゆつくりと扉が開いた・・・と思えば向こう側へ倒れた。蝶番が折れたようだ。

「ええ・・・(困惑)」

蝶番がたまたま鉄製だったのか、どんな腐食の仕方したら折れるなんてことが・・・それもまあ・・・どうでもいい。とりあえずは外には出られた。相変わらず暗いのは変わらないが・・・

それにしても眠い。どうしようもないくらいに眠い・・・もう少し歩いたら休もう。コッーン、コッーンと何も無い廊下に自分の足音が響く。いかにアクチュエーターといえど流石にモーターの駆動音などしない、そりやもちろん高性能ですから！

しばらく歩いて気がついたがどうもこの廊下は先ほど自分が出てきたような部屋が複数あるようだ。しかし自分以外には誰もいない。

「結局……何なんだろう……」

自分の身に付けている装備といいそうだ。強化合成樹脂のプロテクターに各部アクチュエーター強化用の外骨格。レッグホルスターに収納されたハンドガンとプロテクターに取り付けられた予備弾倉。バックパックには無線と外部スピーカー・・・これはもう壊れていて音質があまり良くない。

ただ、どうしてこんなものを装備しているかは分からないけど随分物騒な物だつていうのはよく分かる

バックパックの中身は何が入ってるんだろう・・・

一度立ち止まりバックパックを地面に下ろし中身を改める

内容物は私の活動用の予備バッテリーと何に使うかわからないケーブル、自己修復ナノペースト・・・それから小型の金属の棒だ。

「なにこれ・・・スイッチが付いてる・・・ライト？」

何のためらいもなくスイッチを押し込む

——光は出た・・・結果的には

ブオオン！とどこかで聞いたことのあるような音を出し、何やらビームが出た
そう、ビームが出たのである！

ビームが!! (ry

嘩然とした私は、一度活動を停止したらしい。おかげで眠気はスッキリなくなつた
それはそれとして、やっぱり何か物騒なものばかり持っているようだ。謎が謎を呼び
孤独な地下空間で殺人事件に発展しちやうよ (意味不明)

まあ、全部後回しでいいや。どのみち今考えたつてわからないから

「・・・このケーブルさつき拾った奴に使えないかな・・・」

思い立ったが吉日という言葉もあるし、ね？バックパックからケーブルを取り出し、
ポケットにしまっていた端末のようなものと繋げようとする。端子の形は同じだった
がケーブルの反対側が何にも繋がっていないので何も反応はない。

ピコーン！と何かの早押しボタンでも押したかのような音が脳内に響く。
解説を入れるなら、「ロボ子に電流走る！」といったところだ。

何を思いついたかといえれば先ほどの予備バッテリーにケーブルを繋げるだけなのだ
が。

バッテリーにはいくつかの接続端子が設けられており、必要に応じて使い分けることが可能なのだ

ケーブルを取り付けると、端末に一体成型で取り付けられたモニターに何やら映像が映る

本体はかなり傷ついていたが問題なく動作するようだ。

画面には `waiting` と表示され、画面中央に幾何学模様が浮かび上がる

30秒ほど画面を見つめていると今度は日本語に表記が変わり、『ようこそ』と表示された

画面に触れてみるとタッチパネルだったようで画面が変わった。

その画面に映されていたのは、新着メール30件という通知。

試しに最後に届いたメールを開いてみる。

以下はその内容である

件名：なし

添付：なし

本文：

ロボ子ちや纏！今すぐそこから纏才纏偵※！じやないと螂工纏峨譚・纏具シ
サ荀ソ、チ、マ、笊ヲ、夕、癸ヲ。ヲ。ヲ、ノ、ヲ、オ、マ、ハ、ソ、夕、ア、
又、筍ヲ。ヲ。ヲ

、エエ熙。「タク、ユ、ニ

ごめんさい

・・・何これ・・・頭が痛いよ・・・

世界が歪んで見える・・・色という色が酩酊し、反転し吐きそうになるくらい気持ちが悪くなるが原因は不明だ

視界にホップアップが表示される

深刻なエラーが発生しました：詳細は error5613を参照して下さい

復元可能なメモリーが解放されました。復元しますか？

↓はい いいえ

そこで私は再び意識を手放した

過去と未来と現在と

loading...

文書ファイル、 α から β までをアンロック。

α

第33試験報告。(中略) AI開発は順調に完了。大脳AIと小脳AIのリンクは無事完了した。

当面の課題は並列回路の小型化と神経回路との接続に主眼を置いた開発を行っていくことになるだろう。

β 以下必要経費などのため省略。

第61試験報告。ボディの開発は完了。人工筋肉及び各アクチュエーターの接続と五感センサー実装を行うにあたり、並列AIでは知覚できる感覚に限界があるため、前回実験時に使用したクローン体の脳を流用しボディに対応したパッキ化を行い、一部の

知覚器官を生体部品に置き換えAIを人体の脳で使用することを可能にした。

ただし、脳というのは細胞によって構成された生モノだ。人工血液をナノマシンと一緒に体内に流すことで酸素と栄養を補給する。ナノペーセントに脳や人工筋肉などの元の構造を記憶させておくことで万が一外部からのダメージで一部が破壊されてもナノマシンの働きで時間はかかるが再生が可能になる。ただし生体部品は経年による劣化が著しいため今後は出来るだけ生体部品のサイズを小型化し、機械でより正確な感覚を掴める様に改良が必要だろう。

以下必要経費などのため省略

再び体に意識が戻る。

「はあ、はあ・・・何・・・今の」

さっきのメールもそうだが、一体何があったんだ・・・

暗視装置の電源は切れている。もう使えないだろう。

ヘッドバンドを緩め頭から外す。どうせバッテリーの予備ももう無いし、充電ケーブルも用意がない。捨てていくしかない。

そういえば先程から左目が見えない。左目のあたりを触ってみると何かが目の周りに付いている。

眼帯？そこから細いケーブルが伸びて先ほどの暗視ゴーグルに繋がっていた。

ケーブルを引き抜くところらの眼帯の裏側に映像が浮かぶ。音響探知レーダーか、たまたソリトンレーダーか……どちらかは分からないが視界の左端にマップが表示されている。そしてケーブルが刺さっていたところの付近に指を当ててみると小さいスイッチのようなものが複数ついている。試しにひとつ押してみると2m位先までが見えるようになった。簡易的な暗視装置のようなものだろう。

サーマルゴーグルや赤外線暗視装置とは違い、綺麗にカラーで映像が映り出す。

ゴーグルに繋がっていたケーブルは汎用品ではなさそうなので一応回収。

「あ……メール……他には？」

先ほどの端末を開き、メールをチェックする。

2つ目のメールを開こうとするがパスワードを要求される。

適当に数字を入力しても開かない。どうにもダメのようだ

「……ダメか」

仕方ない、目標を変えよう。

まずは当初の通りまずはここを抜けよう。

勢いよく立ち上がり、再び散策を開始する。

2m先は見えても若干心許なさを感じるので、先ほど拾ったライトを右手に持ち歩

く。

先程よりもはるかに歩きやすい。解像度の高い映像っていうのはいいものだ。

私にはどうやら通常の過去の記憶は無いようだが、知識だけは備わっている。大方、予備記憶領域にでもバックアップを残していたのだろう。

どれくらい歩いただろうか、体感時間にして2時間。やっとの思いで非常階段を見つめることはできた。

登ることはできそうにない。が、階段の前を素通りしてからしばらく行った先に光が見える。

天井にヒビでも入ってるのだろうか、まるでエンジェルラダーのように眩く光が差している。ゆっくりと歩みを進め近づいていく。

しかし、ヒビは天井と床両方に大きく入っており、ジャンプすれば反対側には飛び移れそうだが上には移動できそうにない。下にはどうやら降りれそうだが・・・最悪はどこから梯子とかを使えばヒビから登っていけそうだけど、どっちにしても後でだね。

「よいしょよいしょと・・・」

ヒビの隙間から下の階へと飛び降りる。

着地した自分の両手足を起点に地面の土埃が舞い上がる。手に持ったライトと天井差し込む僅かな光が舞い上がった埃に乱反射し、暗視装置が回路と目の保護のため増幅を遮断する。

先ほど階段があつた場所の直下に向かうために天井を見上げて方向を確認する。

土埃に視界を奪われながらもヒビから見える上階層の瓦礫などを目印に方向を確認してどうにか方向は把握できた。

土埃がゆつくりと流れる風にさらわれ、視界がだんだんとクリアになつてきた。

開けた視界には、ただただ荒れ果てた廊下やひしやげて開かなくなつた扉達が映る。

「じゃ、探そうか」

誰ひとりとしていない荒れた空間に私の独り言が響く。

再び脱出のために一歩、また一歩と階段を探し歩き出す。瓦礫を押しわけ、倒れたロツカーを踏み越え、非常階段にたどり着く。

ここは通れそう。階段も目に見えてる限りは歩いていけそうだし問題なさそうだ。

やつと外に出られそう、という気持ちから少しだけ気分が上がる。

一段、また一段と上がるたびに歩調も心なしに軽いものになつていく。先ほど瓦礫で塞がっていた階層を軽い足取りで駆け抜け、光の差し込んでいた階層へとたどり着いた。

非常階段はここで途切れている。上がってすぐ右に扉があり、そこは開いていた。

そこには、ただひたすらに長い時間をかけて崩れたと思われるコンクリートの山、そこに咲き乱れる黄色や白の草花。割れたガラス窓にスタスタになりポロ雑巾の様体となったカーテン。

自分がいた場所、それはただの廃墟の地下に過ぎなかった。

建物を出て、しばらく周囲を探索した。

工事現場は確かにあった。アンドロイドたちが瓦礫の除去作業を行っている途中だったようだ。

建物の裏手にはどうやら山があったらしく、そこが土砂崩れを起こした際に建物の二階部分までが土砂に埋まっていた状態だったようだ。屋内に土砂が流入しなかったのは窓が少なく、全て強固なシャッターのようなもので塞がれていたからのようだった。表側の被害が少なかったようなのでこうやって推測はできるが事実はわからない。

土砂に埋まってから相当時間が経っていたようにも見えたが、なぜ今掘り返しているのかも謎だ。

「・・・とりあえず、近くの別の建物を探そう」

今日に入るのは正面の今自分が出てきた廃墟と、そこから向かって右に1.5 km程

先の廃病院くらいなものだ。

病院、ね……行ってみようか。何かわかるかも知れないし。

どうやら病院は土砂の被害を受けていなかったようで、建物が朽ちている以外は至って綺麗な見た目だ。

バリバリに割れたガラス戸をくぐり抜けて病院内に足を踏み入れる。

目の前には長椅子が複数並び、天井からは錆びた鎖で「受付」と書かれたプラカードが寂しげにぶら下がっている。プラカードの下にはカウンターがいくつか並んでいて、少し大きめの病院といった印象だ。……もはや使う人などいないのだろうけど。

表の外待合には何もなさそうだ。

「ピィィ!!!」

中待合に移動すると複数の人影が椅子に座って見えた。あまりに突然現れるからびっくりした……

これだけ大きな声で叫んでもその人影はピクリとも動かない。

近づいて見るとアンドロイドたちが座ったまま眠りについていて、もう動くことはないのだろう。生体部品のほとんどが破損している。

座っている者の中には、頭部にPの刻印が入った者や、何かのカードを握り締めたま

ま眠っている者、頭にバンダナを巻いた者、お菓子が入っていたであろう袋を小脇に抱えた者、獣の様な耳と尻尾を生やした者など、アンドロイドの種類や見た目を問わず様々な者が一堂に会していた。このまま彼らは建物と共に朽ちていくのだろうか。

足元には彼らの持ち物だったと思われる物が散乱して落ちている。

朽ちた紙袋から、財布、鍋、ヒヨコのおもちや、ひいてはナイフや刀、銃まで多種多様だ。

「ごめんね、いくつかもらつてくよ」

銃は旧式のM45やMEUを警備アンドロイドが装備しているケースが多い、私のはUSP45なので共通弾薬だ。

自分の持つている銃と弾種の合うものを見繕って弾をもらい、錆びていないナイフを拾い上げ左肩にマウントする。

日が少しずつ陰り始め、外は既に茜色に染まりつつある。

「・・・屋上に行ってみよう」

きつと綺麗な景色が見れる。

なぜかその時は・・・そう思ったのだ。

そして歩み始める

夕焼けの屋上に風が心地よく吹いている。

屋上にはフェンスも柵もない。もはや朽ち果て、なくなっている。

ベンチなどもないので仕方なく屋上の縁に腰を掛け、屋上からの景色を楽しむ。

とはいったものの、近隣に街はなく、ただ廃墟群がポツポツ見える程度だ。もしかしたら、このあたりに人はもういないのかもしれない

とりあえずは脱出という第一条件はクリアしたわけだし、今日はどこかでゆっくり休みたい・・・病院だしシートくらい残ってないかな。

夕闇に沈む病院の屋上で一人佇むその姿は、傍から見ればかなり様になっていたことだろう。

????

小奇麗で薄暗いオフィスの社長室のような部屋で、男は今の自分の上司であり、昔の商売敵と今時珍しい固定電話で通話をしている。

「はい。ええ、問題なく起動したようです。はい、あれから8年です。我々としても搜索には苦勞しました。ええ、では。」

男は受話器を無造作に置くと、机の上のPCの画面を睨みつける。

「全く、俺たちにさっさと居場所を教えておけば楽だったものを・・・」
今度は胸ポケットから携帯端末を取り出し部下に連絡をする。

「おい、見つかったそうだ。確保に迎え。」

男は大層機嫌が悪いように若干悪態をつきながら部下に命令を出す。

『了解。今夜決行する。』

電話口にもわかる不気味で野太い声で部下は言うのでした。

? ロボ子

かなりボロボロだがどうか今晚凌ぐぐらいの毛布は確保できた。

やはりというかなんというか若干だけ夜は冷え込む。肌寒い。

明日はどうしようか・・・メールのパスワードはわからないし・・・

「おやろぼ……」

少し深めに毛布をかぶり直し、眠りにつこうとする。

遠くからだが、まだ工事の音が聞こえる。人が近くにいないから作業しても文句を言われないのだろう。

さ、明日は出来るだけ人のいそうな方に行こう。

改めて目をつぶり、眠ろうとする。

が、それは叶わなかった。

ガンツ！バンツ！ゴツ！といった奇妙奇天烈摩訶不思議な音を上げながら、自分のいたフロアが文字通り“落ちた”

「ハロオ？ロボ子ちゃん……!!!」

6階建ての建物の2階から1階に一気に落とされそうになるが、空中で姿勢を整えなんとか着地する。

「何!?誰!」

声の主は全身が筋骨隆々の妙に体躯のでかい男だった。

「なんだよ、忘れちゃったのかア？残念だなア」

男はさも驚いたといった風にジエスチャーを取る。

「ホントに誰？わからないんだだけd!!!」

男は私が言葉を言い切る寸前で顔を狙ったパンチを繰り出して来る。高性能な私ですから？当然避けるんですけどね。

バックステップで距離を取り、レッグホルスターから銃を抜く。マガジンは抜いた状態にしていたのでマグポーチから抜き取り装填、両手でグリップし頭に照準する。

「来ないで。近づいたら撃つよ。撃つちやうよ！」

「なんだア・・・？その間抜けなツラは・・・逃げ腰にも程があるぜ！」

男は銃を警戒することなくこちらに突進を仕掛けてくる。両足を狙って2発射撃するが弾かれる。

どうやらプレートアーマーでも仕込んでいるようだ。突進を横に避けて躲すが足を掴まれて中待合に体を放り投げられる。

「グッ!!!」

外骨格の強化プラスチックアーマーが壁に叩きつけられた勢いだけで粉々に砕け散る。

ナノマシンとナノペーストでボディの損傷は修復が可能だがアーマーは修復が効かない。手痛い損失だ。

勢いはそのままに壁を突き破り先ほどのアンドロイドたちの中に凄まじい勢いで突っ込む。

姿勢良く座っていた彼らは一気に壁に叩きつけられたり、地面に力なく倒れたり、或いはバラバラになって飛び散ったりと様々だ。

私は投げられた勢いで地面に落ち、痛みあまり意識を失いかける。

「まだ倒れないか・・・タフだな」

気力を振り絞って体を無理やり起き上がらせるとダメージが蓄積した外骨格は自動で体からパーズされた。

装備がほとんどない・・・どうしよう・・・

周囲に視線を巡らせると、先ほど見つけた刀が落ちている。

錆びてなきや使えるはず・・・！

「いい加減楽になれよ!!」

再び男は攻撃をするために突進の構えを取った。突進を開始するタイミングを見逃さず、私は男の攻撃を回避し刀を拾い上げる。

「・・・そんな鈍らで何ができる」

私に攻撃を回避されたことを不快に思ったのか先程よりも一層殺意が増した。

「やってみなきや分かんないよ!」

プラスチックの鞘から刀身を抜き放つ。その刀身にはサビは一つもなく見事な業物だった。

グリップに付いているスイッチを押し込み、刀身に高周波を流す。

「オラア!!」

男はその体軀からは想像もつかない程しなやかで力強いパンチを繰り出してくる。

over オーバー clock クロック system システム… 起動

一時的に処理を加速させ相手の動きを見切る。

スローモーションで見える相手の腕、腰を落としブレードを正眼に構え峰に手を添えて衝撃に備える。

正面から私に向かって迫り来る拳は、体の正面にブレードを構えられたことで自ら切られる形となった。

衝撃。直後続く小気味の良い斬撃音。

高周波をブレードに流すことで斬撃能力を高めたブレードは男の右拳を中指を起点に左右にお別れさせることに成功する。

「ぐあああ!!」

腕を裂かれた男が痛みあまりその大きな体を痛みに震わせる。

腕、特に手は体の中でも特に神経が集中している。当然痛みも相応のものだろう。

「クソ…効いたわよ…」

ん? わよ…?

なにかの聞き間違いかな・・・？

「折角新調した義体がおじゃんよ・・・」

腰のポーチから取り出したテーピングで男は手際よく裂けた部位を巻いて固定していく。

義体・・・ということはナノマシンで自己修復するためだろう。

ブレードを霞の構えで男に向けながら間合いを取る。

over clock system... 終了

over clockが終了したことで改めて時間が正しく流れる。

依然変わらず男は脂汗を額に浮かべながらこちらに攻撃の機を伺っている。

「今は退く。だが必ずまた来るわ・・・その時まで精々精進することね!!」

「あ、ちよつと!」

突進以上の素早さで男は撤退していく。腕じゃなくて足を切っておけば尋問できたか・・・

男が走り去った方向は・・・日が出てる、東か。

目的は定まった。とりあえずは、装備を整えてから東に向かおう。

「外骨格は壊れちゃったし・・・銃とナイフだけじゃ厳しいか・・・」

潜入任務の訓練を受けた兵士ならいざ知らず、私は全くの素人と変わりない経験しか

ない。知識は別としてだが。

プレートアーマー、外骨格、銃もさつき投げられた時にフレームが割れた。

ここにある武器と装備で対応するしかないか・・・

警備アンドロイドのM45か・・・フラッシュライトを装備しているし十分か。問題は放置されていたから可動するかどうかだ。

拾い上げた銃のスライドを引き、スライドストップレバーを引き抜く。スライドを外し、内部パーツの腐食を確認していく。

スライド側は問題なさそうだ。スライドを戻し、弾を装填しスライドを引いてチャンバーに送り込んで手動で排莖し、マガジンが空になるまで繰り返す。手動で給弾を行なった限り給弾不良はない。

サムセーフティの可動とトリガーとスライドのロックを確認。グリップセーフティも同様に。

マガジンとチャンバーから弾を抜き、安全な方向に銃口を向けトリガーを引く。ハンマーダウンは問題ない。

「後は発射か・・・ここはやめておこう」

プレートアーマーからマグポーチとホルスターを取り外し、身につけている衣類に取り付ける。マガジンは互換しないから弾を適時詰めて使うしかないかな。M45、ME

U用は互換するから7個はある。どうにかなるか。

USP45のマガジンから弾だけを抜き取りバックバックにしまう。ナイフは先程と同じく左肩に付け直し、拾った高周波ブレードは左腰に取り付ける。ベルトが残ってよかった、マグポーチとホルスターが付けられるというのもそうだけど、警備アンドロイドと軍用アンドロイドの装備からダンプポーチなどの収納を借りて取り付けられた。

鍋か・・・弾除け祈願で被っついこう。

AKが落ちていたのだが経年劣化でガスピストン上部のハンドガードがガタついていたので、バンドナを軍用アンドロイドから拝借し、バンドナで巻いて固定する。

装備はこんなもので十分だろう。AKも弾薬は2人から貰ったから必要以上に足りているし、M45も問題ない。刀とナイフも近接用でもらったし・・・大丈夫かな。

「荒らしちゃってごめんね。これ貰っていくよ、ありがとう」

朝日が昇り、東の空から地を照らす中廃病院を立ち去る。

男が走り去った方角へと向かって歩み始める。自分を知っているような口を利いた男から私が何者なのかを知るために。

南東へ

若干乾燥気味の寂れた街の中を歩いている。

場所は先ほどの病院から東南東に5 km。時間は時刻合わせをせずに1時間半と
いったところか。

このあたりは屋上から見えたあたりだ。廃墟群とはいえ人やアンドロイドが完全
いないわけではない。廃墟の倒壊に巻き込まれないような場所にぼつらぼつらと真新
しい家が建っている。

流石に銃を持った状態で接触しようとは思わないが・・・ふむ。客観的に私の姿を見
ると相当なほんk・・・高性能に見えるぞうだ。

頭に鍋、肩にナイフ、腰に刀に足に銃。手にはAKだ。自分なら近寄るのは御免被る。
「もう少しだけ進んだら休憩しよう」

荷物を置けそうなら置いてから近くの住民のところに行つてみよう。

しかし、夜とは裏腹に昼は昼で少し暑い・・・

異常に暑いわけではないが、蒸す。こういう時は少しでいいから水を浴びたいもの

だ。

昨晚のこともあるので少し警戒しながら廃墟の天魔楼を縫うように進む。

今のところは何の問題もなく進んでいるが、何かあつてからじゃ遅いしね。

角を曲がると壊れた車が横倒しになって道をふさいでいる。

どかすために近寄つていくと後ろからいきなりガチャ、という音が聞こえてきた。

AKのセレクターバーをセミオートからフルオートに切り替えながら後ろを振り返る。しかし何もいない。

いや、動いているものは見つけた。円筒状の、電池に手足を生やしたようなものがあった。古いケーブルのようなものを2，3体で引つ張つて運んでいる。大きさはだいたい膝上くらいの大きさだろうか。それぞれポロポロに汚れて、色々な場所にキズが入っている。

古いアンドロイド、といった風体ではない。少なくとも私はあのアンドロイドは知らない。

そもそもにしてアンドロイドかすら怪しいが・・・

曲がつてきた角に姿が消えそうになったので思わず

「待って！」

と声を掛けてしまった。

最後尾の子が急停止してケーブルを引っ張るものだから前の二人は勢いよくコケたのだろう。ガンツ！という音が角の向こうから聞こえてきた。

前を歩いていた二人も角からひよこつと頭を覗かせる。ちようど三人が縦に並んでいる・・・ちよつとシユールな光景だ。

AKのセレクターをセーフティに切り替え、スリングで背中側にずらす。

円筒形のアンドロイド達は距離を取るでも警戒するでもなく、こちらが近づくのに合わせてゆっくりと歩み寄ってくる。

『はろーぼー』

突如として3体のアンドロイドが発したのは、挨拶と思われる言葉だった。

とりあえず挨拶は返しておこう。礼儀だし。

「は、はろーぼー！」

挨拶を返してみると3体のアンドロイドたちは喜んでいるかのように踊っている。

「言葉は・・・わかるよね。今日って何年の何月？後、ここはどこ？」

とりあえずは最初からの疑問をぶつける。

彼らはお互いに顔を見合わせるとその内の1体が握手を求めるように手を伸ばしてきた。接触回線の情報リンクだろう。

私も手を伸ばし、メモリーセキュリティのレベルを下げる。

downloading... check... ok

今日の日付は・・・2048年6月23日か。場所に関する情報は無し・・・
情報を解除、ファイル「メールNo.2」のセキュリティパスを解除します。

突然視界にポップアップが表示された。メールのパスワードが解除された・・・？ど
ういうこと？

上着のポケットから端末を取り出し、メールを確認する。

メールの左上に表示されていた鍵のマークが消えてnewの表示がついている。読
めそうだ。

日付：1/30/2039

件名：お知らせ

添付：なし

本文：この度私たちクライング・ホロセキュリティーズが正式に沿岸警備に参加する
ことが決まりました。そこで、現場での兵士を募っておりますつきましては、下記リン
クから詳細をご確認ください。

なお、代理戦争に参加を希望されるされる場合、本社では全身の義体化を推奨してお

ります。それらに必要な経費等は本社が無償で支払わせていただきます。

t t p s : / /

日付は9年前・・・内容はよくある迷惑メールの類、だけどこれはPMCのただの広告とも違う・・・代理戦争？

なんだろう、これ・・・

“ボク”は必死に考える。思い出した情報はない・・・URLもリンク切れで使えない。なんだろう。義体、代理戦争、クライング・ホロセキュリティ・・・さつき襲ってきた男は確か体を義体化していた・・・いや、このPMCと断定するには早計だろう。ガチャツと不意に背後から小さいが確実に音が鳴ったのを私のセンサーが捉える。

AKのセレクターをフルオートに切り替え、後ろを振り向く。同時に頭にかぶっていた鍋をその方向に投げる。

カランカランと鍋が地面に落ち、跳ねて、また落ちようと放物線を描く途中で何かにぶつかったかのようにその動きを止める。

当たったと思われる場所に水面が波打ったかのようなノイズが発生し、次第に何らかの物体が見えてくる。

義体化兵士だ。そいつは何を言うでも、何をするでもなくただそこに佇んでいる。

頭部のバイザー越しには相手の視線どころか何も読み取ることができない。

腕には所属していた部隊かもしくはPMCのワッペンが貼り付けられている。しかし擦れ、汚れ等でもはや何が書かれていたかなど判別のしようもない。腰のベルトにはホルスターとポーチ、高周波ブレードが取り付けられ、足にはブーツナイフが装備されている。

なんの動作も示さない彼の様子を見る限り、少なくとも敵意は感じられない。

警戒はしておくが・・・AKのセレクトターをセーフティにし、スリングで肩に吊る。

背後に居るはずの3体のアンドロイドに向き直ろうとするとボクの横を通り抜けサイボーグの元に駆け寄り『はろーぼー』などと挨拶している。どうやら知り合いのようだ。

義体の男は相変わらず喋らないが・・・

世の中やはりコミュニケーション、私から歩み寄るべきか・・・

「ねえ、ボク人を探してるんだけど。筋肉もりもりマツチヨマンで義体の男見なかった？」

男は顎の辺りに手を当てるような仕草をとり考えているようなジェスチャーをしている。

しばらく待つと思いい出したようで男が向かった方角を指差した。方角は合ってるならこのまま追跡を続けよう。

「ありがとう、じゃあボクは急ぐから・・・」

お礼を言い残して指差した方角に従い廃墟となった町の中を走り始める。

走り続ける、というのは当然だが速度的に考えても非効率的だ。

かと言って走れそうな車両もそうそうあるものでもないので、悲しいことに不整地を全力疾走するという某FPSゲームじみたことをすることになっているわけだ。世の中世知辛い

というか某FPSでも戦闘機とか戦車、装甲車だつて登場するというのに・・・現実つていうのはどうにも思うようにはいかないらしい

しかしどうにも解せない。ボクは急ぐ足を緩めて一人思案する。

ロツクのかかった複数のメール。突然の襲撃に荒廃した世界・・・あの義体の男を尋問すれば何かわかるかと思つたが、果たしてどうだろうか。敵はわからない、記憶もない。なんにせよ情報を得ないことには何も状況は変化しない。

緩めた歩みを再び急ぎ足へ戻す。目視の範囲だが、数キロ行けばまだ人が住んでいそうな建物群が見える。そこまで行つてから考えよう。

吹き返す息は誰がためか

銃にナイフ、刀まで。多種多様な装備を身にまとい、若干草木の生える荒野を走っている。

太陽も真南に上がり、気温もかなり上がってきている。ボクが今走っている地面がこの国のものかもわからない状況だが、暑さというのは国や状況に関係なく無慈悲に体力を奪いに来る。

幸いなことに、荒廃しているといえど草木が生えているということは植物が生存可能なレベルで地面には水分があるということだ。高所から緑の豊かな場所を探せば川が水場があるはずだ。探してみよう。

足を止め、前後左右を見渡し、周囲を見下ろせそうな高所がないかを探してみる。現在位置から東に向かうと若干下り気味になるが、反対に西側に行くと小高い山がある。

山があるなら東側には川もあるかもしれないが・・・とりあえず南東方向へ進む。迂闊かつ愚直に東に行けばあとで後悔するかもしれない。

事実、東には目印となる豊かな緑はなかった。代わりに南側、つまり若干西側方向に對しては距離こそあれど低地に緑を見つけた。

西には山がある上り方向になるから、遠回りになるが南東方向から迂回して低地に向かうのがおよそ最善であろう。

急げば冷静さを失い、余計に体力を消費する。ことわざの通り、ゆっくり行くのがベターなのさ。

1時間半ほど歩いた頃だろうか。目的の地域まで後もう少しつてとところで比較的まだ綺麗な家屋を見つけた。人の気配はない。生活感も同様にないが、面白いことに地下にガレージがあった。探してみたらまだ使いそうな車両が残っていた。

流石に燃料がないのでどうしたものかと探していたら、建物の裏に燃料の保管庫があった。一体なんの建物なのやら……

使えそうなのは1台だけ、オフロード仕様のバイクだ。他にもいくつか車なんかもあったが電装系をやられていた。ここにある材料で治りそうもない。

ヘルメットは前の持ち主が使っていたであろうフルフェイスタイプの物が一つ。サイズは問題なさそうだ。他にも何かあるか探してみたが残念なことにどうにも何も見つからなかった。居抜きというわけではなさそうだが、妙な感じだ。

キーもガレージの壁に引つ掛けてあったので手早く給油を済ませる。

セルを回してエンジンをかけようと思ったが、バッテリーが放電してららしい。

オフ車はいいねえ、未だにキックスターターが付いてる。バイクにまたがってスターターに足をかけ、勢いをつけて思いっきり蹴る。

始動しない。もう一度繰り返す。ダメだ、流石に放置されすぎてる。エンジンのかかりが悪い。燃料が回っていないんだらう。数回繰り返し返さないとダメそうだ。

2回、3回、4回……繰り返しスターターを蹴る。

ブオオン、ドトドド……甲高いような、それでいてどこか頼りがいのある音だ。放置され、動かされていなかったエンジンが白煙とともに盛大に息を吹き返した。

だが、当然だが完全ではない。チョークを引き、回転を上げ暖気を行う。暖気している間に軽く車両をチェックしよう。

さつきは空気圧とサスペンション、ブレーキ程度しか見なかったが、車両の腐食なんかも確認しておきたい。

車両を外から大雑把に見る。エンジンやフレームなんかは表面がうつすら曇るような酸化具合だが、サビ等は見当たらない。車体下部や、ビスなんかもそこまでの腐食はないように見える。

メーターも問題なく動いている。ギア、クラッチも問題ないだろう。

アイドルも安定してきた、走り出しても大丈夫かな。

シートに跨る。柔らかい訳ではないが、反発が強いわけでもない適度な硬さ。ハンドルを握る手や全身に伝わるエンジンの鼓動。周りに広がる若干のガソリン臭。

「悪くない・・・！」

スタンドを足で弾き、クラッチを握りギアを入れる。ブレーキを離しアクセルを回す。

甲高いエンジン音がけたたましく響き渡り、バイクは前へと走り出す。

出だしは好調、先ほど歩いて来た道まで斜面を駆け上がり、およそ水場があるであろう方向へと車体を曲げる。サスペンションが軋み、反発し、岩を乗り越える衝撃を吸収する。

移動手段が手に入ったのはいいことだ。燃料が持つ間なら大抵の道なら普通の歩くより体力を温存したままに速い速度で移動ができる。

数分走った程度であつさりと目的の緑地帯へと到着することができた。

結果を言ってしまうえばちよつとした沢を見つけたことができた。ただ、同時になにやら道路らしきものも見つけた。

らしき、というのも舗装されて看板が立てられているのだが、随分と人の手が入っていないように見えるからだ。有り体に言えば人が通った痕跡が少ないということである。

落ち葉は数ヶ月、あるいは数年か。幾重にも重なり、下層の方は若干分解され土へ還元され、看板に至っては苔が表面に付着し、青白緑の面白いカラーリングになって薄汚れて、ただそこに佇んでいる。

道は東に続いている。木が生い茂っているから太陽光を余計に浴びずに済む。幸いオフ車にしてみればこのくらいの地面なら問題外だ。

バイクを道路まで移動させ、東に続く道を見据える。眼前には木漏れ日が差し込む木々のトンネル、周囲にはエンジンの甲高い音が響く。

アクセルを回しエンジンの回転数が上がる。ブレーキを離すとタイヤが土を巻き上げ、地面をグリップして走り出す。

ボクの旅は未だ始まったばかりである。

キカイな国

時間にして3時間程度だろうか、随分走ったような気がする。少し日が陰ったためか先程よりも少し薄暗い。

目的地があるわけではないから別に急ぐ道でもないが、自分が今いる場所がわからないというのとはなんとも言えない不安感に襲われる。

変わり映えのない景色をボーッと眺めながらいつ終わるとも知れない道を走り続けている。

しばらく走っていると正面の緑の中に急に黒いものが見えたため不審に思いバイクを減速させた。

その黒いものの前まで近づき確認してみるとそこにはひたすら闇があつた。老朽化したトンネルだろう。トンネルの入り口上部のトンネル名が書かれた看板は苔が厚く生えており文字の判別はできない。

トンネル内を懐中電灯で照らしてみると、見た目の割にはしっかりしているようで落盤などの心配はなさそうだ。

バイクのライトを点灯させてゆっくりとトンネル内に進める。エンジン音がトンネルの中に反響する。

トンネル内の地面はアスファルトが老朽化でボロボロになり、砂利道のようになっている。壁や天井から少し水が染み出ているようで、若干湿っている。

その染み出た水が壁で人のような形になっていたりして少し怖いのは内緒だ。

トンネルは途中で少しカーブしているらしく、出口の光は見えない。唯一トンネル内を照らすのはバイクのヘッドライトのみだ。

体感にして数十秒、大した距離を走ったわけではないが少しカーブしているトンネルの壁に出口のものと思われる光が当たっている。

それを見てトンネルが落盤していないことに安心したボクはバイクのスピードを上げ。

トンネルから出たボクの視界がホワイトアウトする。その瞬間、ふとトンネルの中に何かが見えた気がしてバイクを急停止させた。

ボクはトンネルの中を見つめた。

トンネルの中はやはり、入った時と同じく闇に包まれている。トンネルの中を突き抜ける風がゴウゴウと音を立て、ボクの不安を掻き立てる。

「気のせい、かな……」

何を見たというわけではない。それでも何か言葉では形容しがたい、後ろ髪を引かれるような感覚と、ここにはいけない様な不安感が脳裏をよぎる。

ドドドド、というバイクのアイドリング音が急に大きくなったように感じ我に返る。ともあれ無事トンネルは抜けたのだ。バイクの進行方向に向き直りアクセルを開ける。

先程に比べると少々木々の量が減ったような気がする、少しではあるが空も見える。

大した距離を走った気はしないが、急に目の前に障害物が見えた。後ろからではなんなのかわからなかったが、表に回ってみたら一目瞭然だった。進入禁止の看板とバリケードだ。

なにはともあれ無事人が使っていそうなまともな道に出たわけだ。・・・そのはずだが・・・。

今出てきた旧道と合流しているこの道もやはり閑散としている。先ほどの道とは違いアスファルトは見えているし、多少ヒビが入っている程度で普通に走行可能な道だ。単純に田舎道なのだろう。今出てきた道路の反対側はガードレールになっており、下を覗き込むと数メートル直下に沢が見える。ただやはりというかなんというか、降りたら登ってくるのは骨が折れそうだ。

なににせよ先程よりはいくらか走りやすくなるだろう。再びバイクを道沿いに走らせる為進路を東に向け、走り出させる。道は良くなっても景色は相も変わらず森の中。

いつになつたら追いつくのやら・・・

時は少し進んで数時間後。

辺りも日が陰り薄暗くなりつつある時間帯。ガソリンの残量も約4割程度を消費したボクは未だに追いつくこともなく走り続けている。

道中多く生えていた木々も数を減らし、草地の方が面積を増やしている。背の高い草の切れ目から時々ボロボロになった廃墟が覗いたりしていたりするのを見てしまうとなんとも言えない気持ちになる。

「そろそろ野営の用意しないと日が暮れるかも」

そつと一人呟いてボクは止まれそうな場所を探して走るバイクの上で辺りを見回す。すると現在の進路から見て若干左方向に煙が上がっているのが見えた。

「方位は・・・北東方向？」

目算だが距離自体は大して遠いようには見えない。こちら辺の地図が手元にないのでも何とも言えないが、おそらく道沿いに行つて途中で左折すれば行けるのではないだろうか。

安直な考えのもとボクは今見えるものだけを頼りに進路を少し変えるのだ。

煙が上がっていた付近まで走ってきた。

煙は草の切れ目からまだ見えている。煙に近づくとつれてだんだんと道路の左右に打ち捨てられた車の数が増えてきた。車の数が増えるのに比例して草木なんかの自然が少しずつ減っている。

若干の丘を超えたあたりになって、やっとボクは煙の出ている所在を突き止めることができた。

壁だ。・・・少し訂正すると壁の向こうだ。

突然目の前に姿を現したのは高さおよそ3〜5m程度と思われるコンクリート製の壁。バリケードか何かのようにそこに佇んでいる。今ボクが走っている道路はこのゲートと思われる場所へ続いているし、入れないわけではないのだろうけど・・・。

この際だし行きます。行きますとも。

アクセルを回しバイクをまっすぐ壁の中へ続く道を走らせる。近づいて初めてわかったが警備員のような人が立っている。歩哨と言いつい換えてもいい。まあ入るのに手続きがあるのかもしれないけどね？

ゆっくりと減速し、警備員の横で止まる。

警備員と思われるものに話しかけようとして気が付いた。朽ちたアンドロイドだ。

反応がないどころではない。体表面の人工皮膚は剥がれ落ちプラスチックの外骨格がむき出しになり、着ている衣服は経年でボロボロだ。それでもただただ立ち続けている

る。

「・・・扉は空いてるみたい」

ブレーキを離してバイクを前進させる。

壁の中は・・・想像とは違った。

思ったより活気がある。市場のようになっていて、場所によって買物をする者、あるいは道々を歩く者など様々だ。

まるで外の警備員の存在が嘘のように・・・人が多い。

困惑するボクをよそに目の前を横切った男に話しかけてみる。

「ねえ、ここはどうしてこんなに人が多いの？」

彼は少し驚いたような顔をして答える。

「おや、旅人さん・・・かい？見てくれじゃわからないだろうけど、ここにいるのはみんな人間じゃなくてアンドロイドさ。人に雇われて働くのが嫌になった奴もいるし、捨てられてここに来た奴もいる。ここに人間はいないよ」

「え・・・？あ、ありがとう」

「どういたしまして。この“国”を楽しんで。良い一日を」

彼が言った言葉を考える。国、と言った。では外のアレは入国管理官のつもりだろうか。

なんにせよ、アンドロイドの国だとは……驚いた。

再会の兵士

バイクを適当にスペースがあるとどこかに止めて街の中を歩く。

国というにはあまりに小さく、街というには少し大きい。しかし世の中にはおよそ2・000m²の国というものも存在するし、面積は関係ないのかもしれない。

しばらく街並みを見ながら生体スキャンをしたが通りすがりの彼が言ったとおり、やはり人間はいなかった。反応があったのはアンドロイドの生体パーツとちよつとした小動物だけだ。

それとアンドロイドたちを観察していて気がついたが、こちらからアクションを起こせばそれに対応はするが、能動的に彼らがボクに対して何かをするということはないらしい。話しかけたり、目の前で転んだり、触ったりしない限り何もしない、それぞれかこちらに見向きもしない。普通なら銃を持った相手がウロウロしていたら大なり小なり好奇の目を向けると思うのだけど……

それともう一つ、先ほどからアンドロイド一体一体の動きを注視しているが、3時間周期くらいで同じ行動を延々とトレースしている。一定のアルゴリズムで動いている

といってもいいだろう。

ボクが言うのもどうかと思うけれど、所詮はプログラム。同じ事をし続けるしか脳がないのか・・・？

それとも、もしここにいるアンドロイドたちが元は人間と生活していて、その人間を真似て動いているとしたら？

ゾツとしない話だ。なんにせよ、ある程度情報は集まった。ここに長居する理由もないだろう。

考えるのをやめて腰かけていたベンチから立ち上がる。

A Kの弾倉の残弾とチャンバー内の弾薬を確認する。撃っていないのだから弾は問題なく装填されている。

バイクを取りに戻る途中の道で見覚えのある物がバイクの近くを歩いているのが見えた。

例の電池型のアンドロイドだ。ここにもいたのかと思っただが、観察していて一切見かけなかった事からここにいたものでは無いのだろうか？だとしたらどこから・・・？

当然答えなどではるはずはない。

「俺が連れてきた」

横道から突如声をかけられた。

驚きのあまり肩に掛けていたAKを瞬時に構え、射撃体制に入ってしまった。

「・・・君に銃を向けられるのは3度目か？」

見覚えのある格好だ。ボロボロの・・・サイボーグ。電池型のアンドロイドと一緒にいた・・・

「ごめんね、急に声かけられたからびっくりしちゃって・・・ボクに用でも？」
銃を下ろして疑問を投げ掛ける。

「あいつら」が君を追いたい。それで追いかけてきた。それに・・・いや、なんでもない」

気になる言い方をする男だ。ボクは少し怪訝な顔をして彼を見る。

「そんな顔をしないでくれ」

「なんだかなあ・・・それはそうとどうやって追ってきたの？」

「さして難しいことは思いつかなかったからな、とりあえず東にある一番近くの人が寄りそうな街に来ただけだ」

「ええ・・・？」

愚直なのか、はたまた頭が切れるのか分からないな

「ああ、そうだ。忘れるところだった」

彼は何かを思い出したように話を切り出す。

「そういえば君の探している筋肉もりもりマッチョマンの変態……だったか？が腕につけていた部隊章なんだが……」

「変態じゃなくて義体の男ね。……紛らわしいなあ……名前は何？」

表現上というか、便宜上というか……キャラが半分くらい被ってる人を言い表すには紛らわしすぎるのでボクは彼に名前を聞く。

「俺か？俺は……そうだな。ミスターXとでも名乗っておこうか」

「むう、ふざけてるの？」

ボクが不機嫌そうに聞き返す。

「……わかった、俺はジャツカルだ。前にいた部隊じゃずつとそう呼ばれてた」

ジャツカルと名乗る彼は少しおどけるような動きで答える。

ともかくにも固有名詞が付くだけ区別しやすくありがたい。

「話、続けて大丈夫か？」

彼は少し疲れたような様子で話を戻そうとする。ボクは無言で頷き同意を示した。

「その筋肉ダルマがつけてた部隊章は確か……クライング・ホロセキュリティーズだった。君が知っているか、はたまた覚えているかは知らないが9年前に沿岸警備に就いた民間軍事会社だ」

話を聞いて触発されたようにボクは端末を開き、件のPMCの勧誘メールを開いて彼

に見せる。

「このメールの・・・？」

「そうだ。メールの内容に関しては嘘偽りない。問題は6年前の紛争だ」

「紛争？」

「連中は最初は政府側の依頼で反政府勢力や反政府側が兵器として利用してたアンドロイド群の破壊活動なんかをやってた。・・・俺も共同作戦で一緒にな。途中で気がついたのか、それとも飽きたのか、気が付いたら俺たちは反政府勢力ではなくPMCと戦ってた」

「それって・・・」

「ああ、政府側に対する一方的な契約破棄だ。言ってしまうえば裏切りと同義だな」

ボクの知らない戦争・・・6年前・・・思い出せない。

「・・・まあ、そうだな。連中は兵士をほとんど義体化してる。兵士一人あたりでも相当だが、政府軍にも引けを取らないだけの大規模な戦力を有してる。もしも戦うのなら油断するな。それだけだ」

男は周囲を見回し、電池型のアンドロイドを連れてくる。

『『はろーぼー！』』

「はろーぼー？」

挨拶をされたのでボクも挨拶を返す。

「まあこれ以上ここで立ち話つてのもなんだしな。もうそろそろ日も落ちる、今日はここら辺で適当に休んで明日詳しいことを話そう」

「え？うん・・・もしかして付いてくるの？」

「もちろん。つっても君が嫌じゃなければだけど」

「まあ、いいや。よろしくねー！」

アンドロイドの国を出てしばらく走ったところの高台で男がアンドロイドと一緒に乗ってきた高機動車の横にバイクを止めて近くの適当な場所にタープでテントを張った。

「もう外も暗い。しばらくは焚き火もしているがそのうち消す、今のうちにゆつくり寝るといい」

「うん、わかった。それじゃおやす」

『『おやすぼー！』』』

「・・・おやすぼ」

「ああ、おやすみ」

といった具合で寝る直前だ。夕食はボクが投げた鍋で作った寄せ鍋みたいなやつ

だった。というかアレ持ってきてたのが一番驚いたよ……

ボクはテントの中の手頃な場所で体育座りをするような形でAKを抱えて眠りに入る。

人間ではないから眠るといよりはPCのスリープモードに近いのだろうけどね。

銃声が聞こえた。周囲では爆発音と悲鳴、怒号が鳴り響いて、誰かがボクの手を引いている。

その誰かが必死で何かを伝えてくるけど……ボクはどこか上の空で。次の瞬間、その誰かは誰だかわからない肉の塊に変わっていた。

しばらく景色をぼーっと眺めてたら今度はボクは銃を握ってた。格好も強化外骨格を身につけてる。

そこはどこかの建物の一室と思われる場所で、部屋の隅に置かれた鏡に映る自分はずか血まみれだった。